以呂波文庫 二

Gôkan:(No. 04
Iroha Bunko.
Book 1--2.

へ13
3684
2

門へ13
號卷 3684
2

伊呂波文庫 三編 上冊

柳煙亭種久著

男齋國芳画

いろは文庫

三編上

三編下

甘泉堂

忠臣孝婦 以呂波文庫 三編下之巻

益ゝ國を思ふの名劍も本文まゐらせ
君より勅命を蒙りて偽のおゝせも
何某の秘花をさそはれ

表

長サ二尺二寸五分

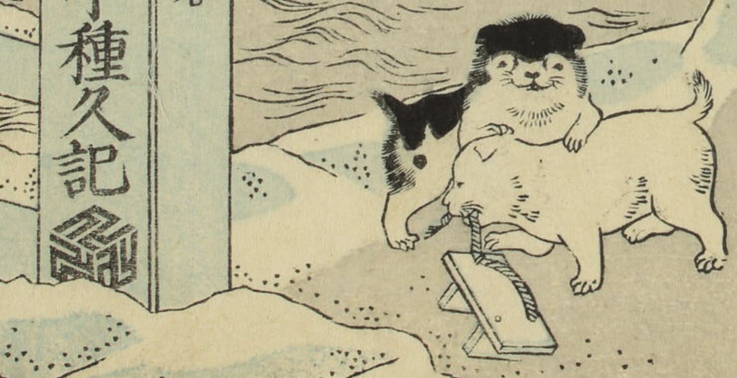
裏

中一寸八分

栗田口近江守作

元禄十二年十二月
不破數左門正種女

何某忠臣の隨一たる大鷲文吾（俳名を子葉と云）
性きつめて兼忽ち心氣噪急人なれば或日大星
由良之助文吾が心を平穩る業を学と教へに
程い沈吟て。いつまで業を学ぶが心氣を静る
と問のまゝて大星へ。詼諧を学ぶと言にぞ
只管が彼詼道を思ひ潜め『武士の嘗聞て立ふる
と。自然ある未乃逸を得ざるにぞ江湖が知ざる者へ
無ア少そ。其ことを是とゝかゝれ。文
窓の北面を雪いと深き谷地戸の菴刀
掃ごゑが。初音わる〳〵嘗比をくづる
聲もぐ渋く運ぬ筆の立
うゐて文吾のむこう思ひ出
まゝ心氣を静て幾回う作意を
錬が暇ふく最忽卒が稿を脱ね



大鷲文吾

晋子其角

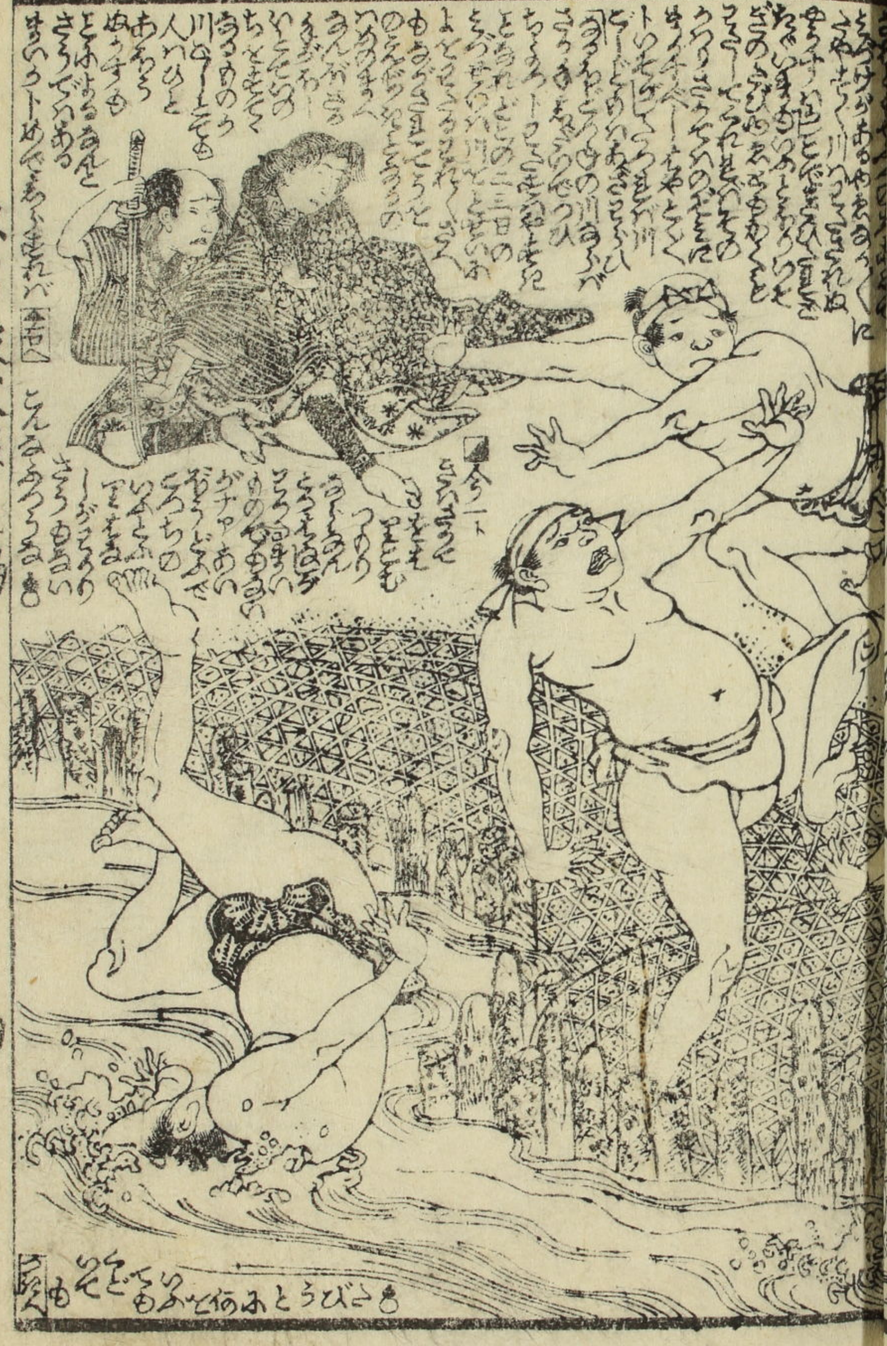
年の波やあの
あつまる人の多き
宝井其角
なの
その
湖月堂

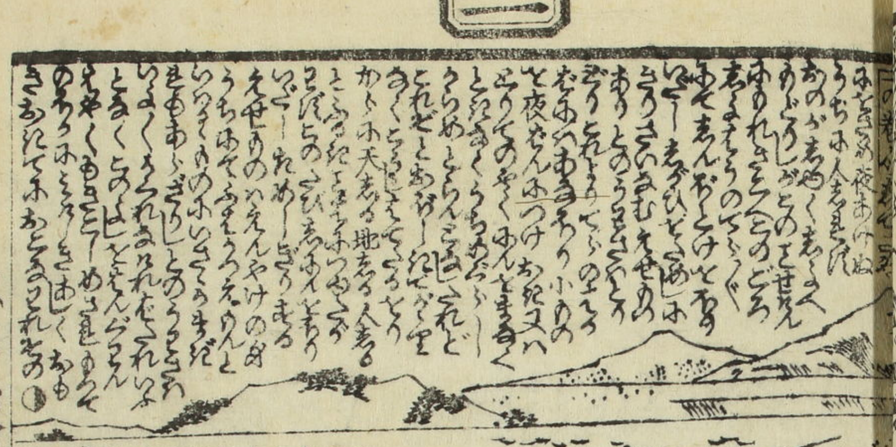
三べんうちこすもう

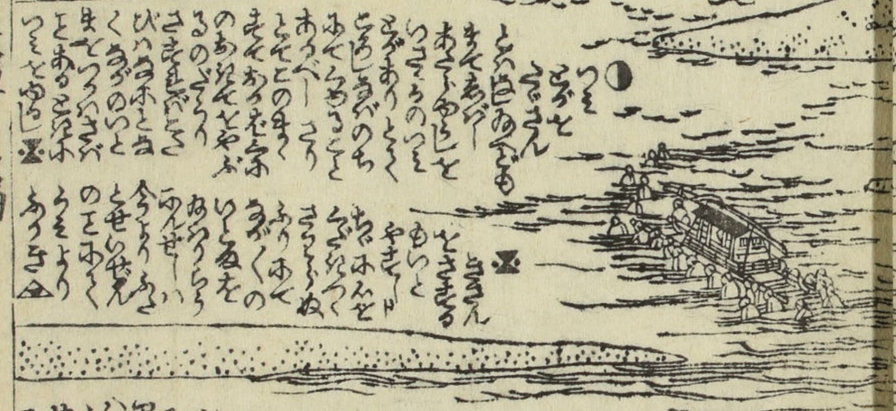
あつぬぢはこれちくごのさとなまえをそのまゝ名もろ丸大井川のあめのふるべきようすにてつゆのかゝらぬ間にとおりぬけんとおもへどもいつまでもやまずうちはまりてとうとうこゝにとまりぬ

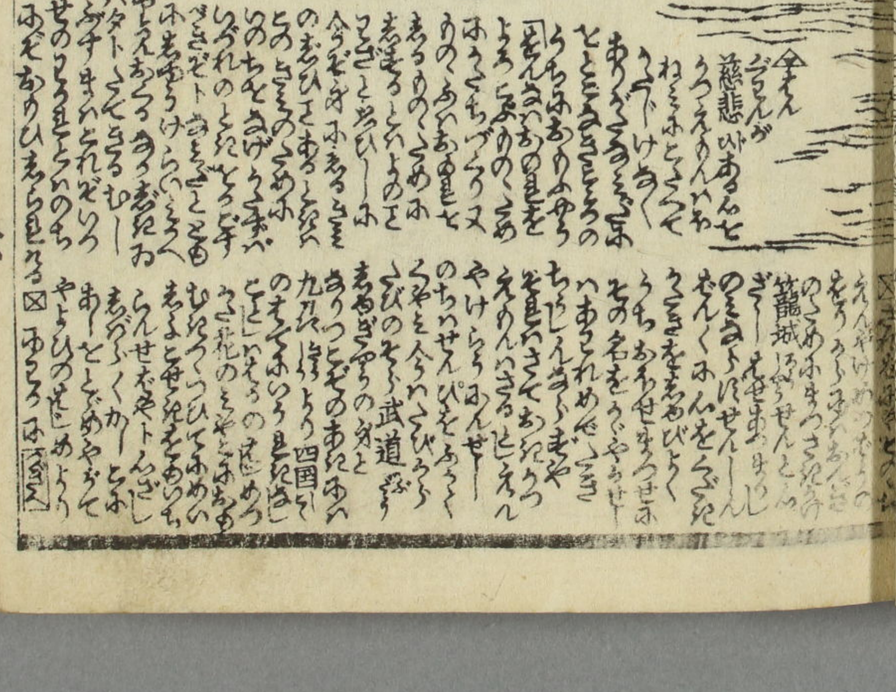
○此ゑ画ける男女の旅人へ後々の巻にいでゝあり

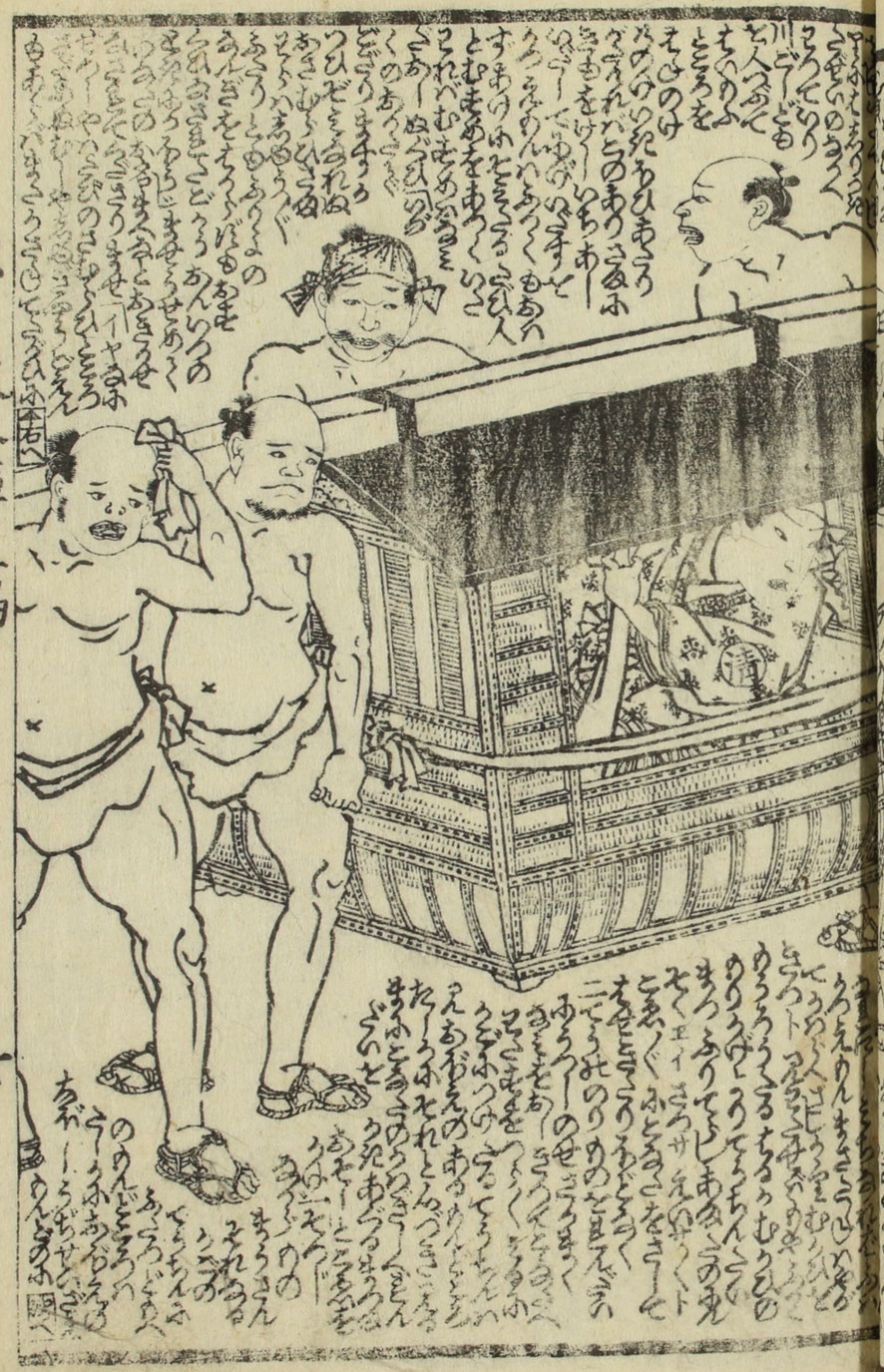
此人物の名を加へ看官のふるまひをみるべし

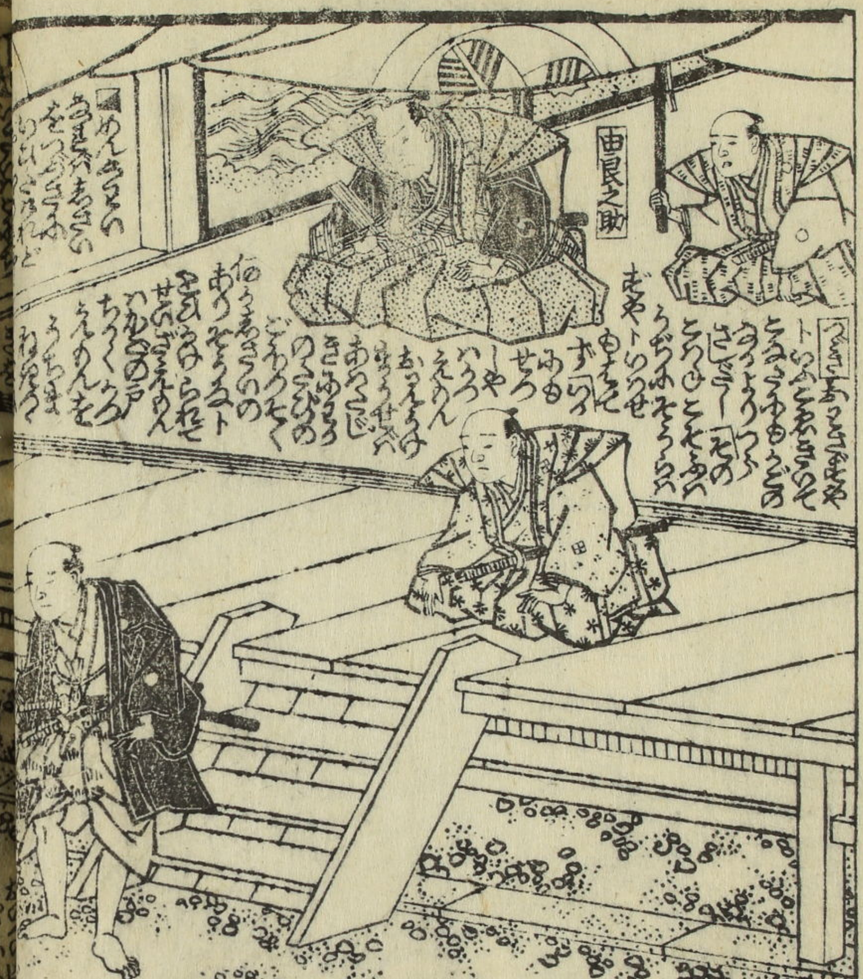


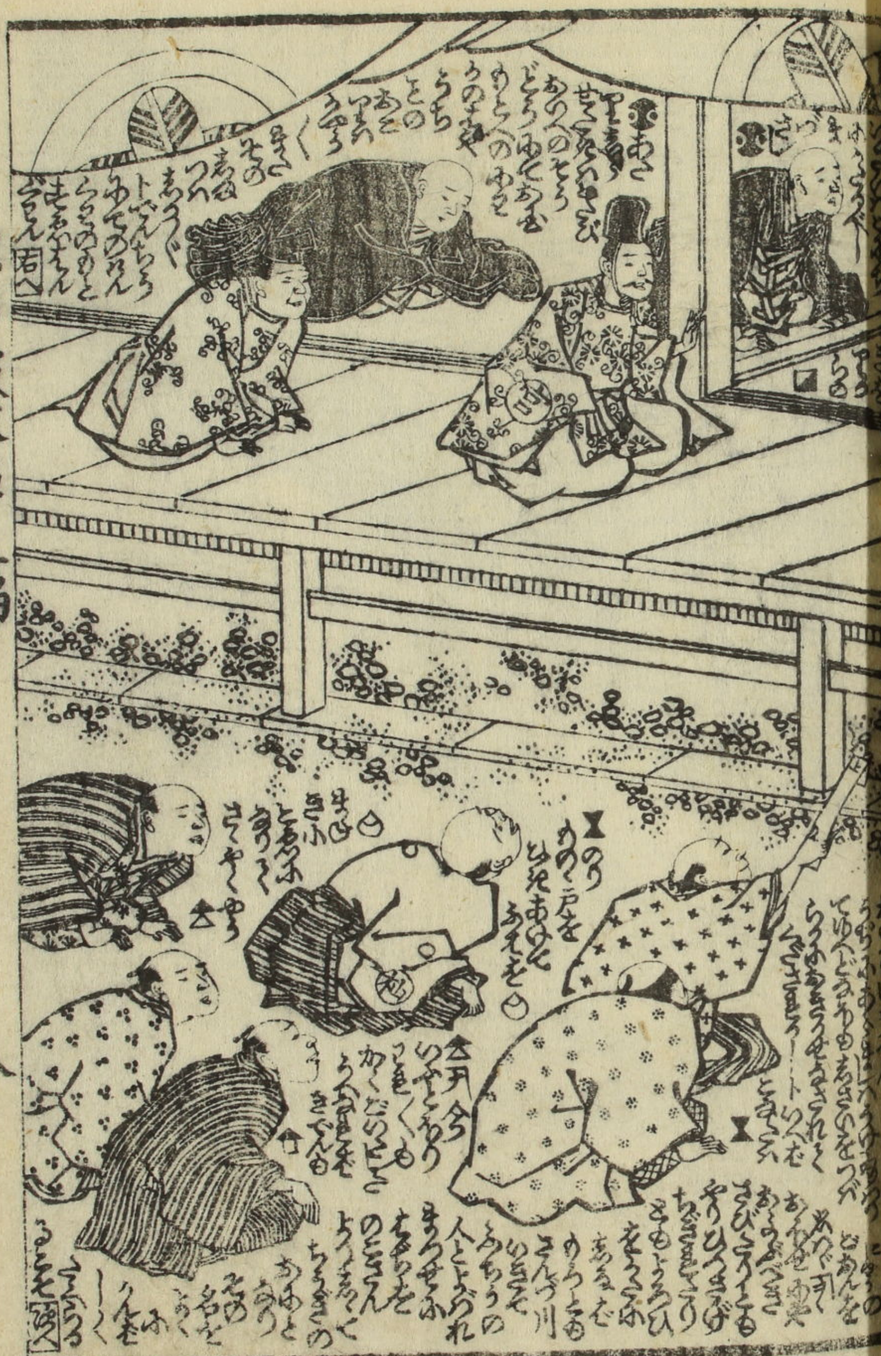

金谷

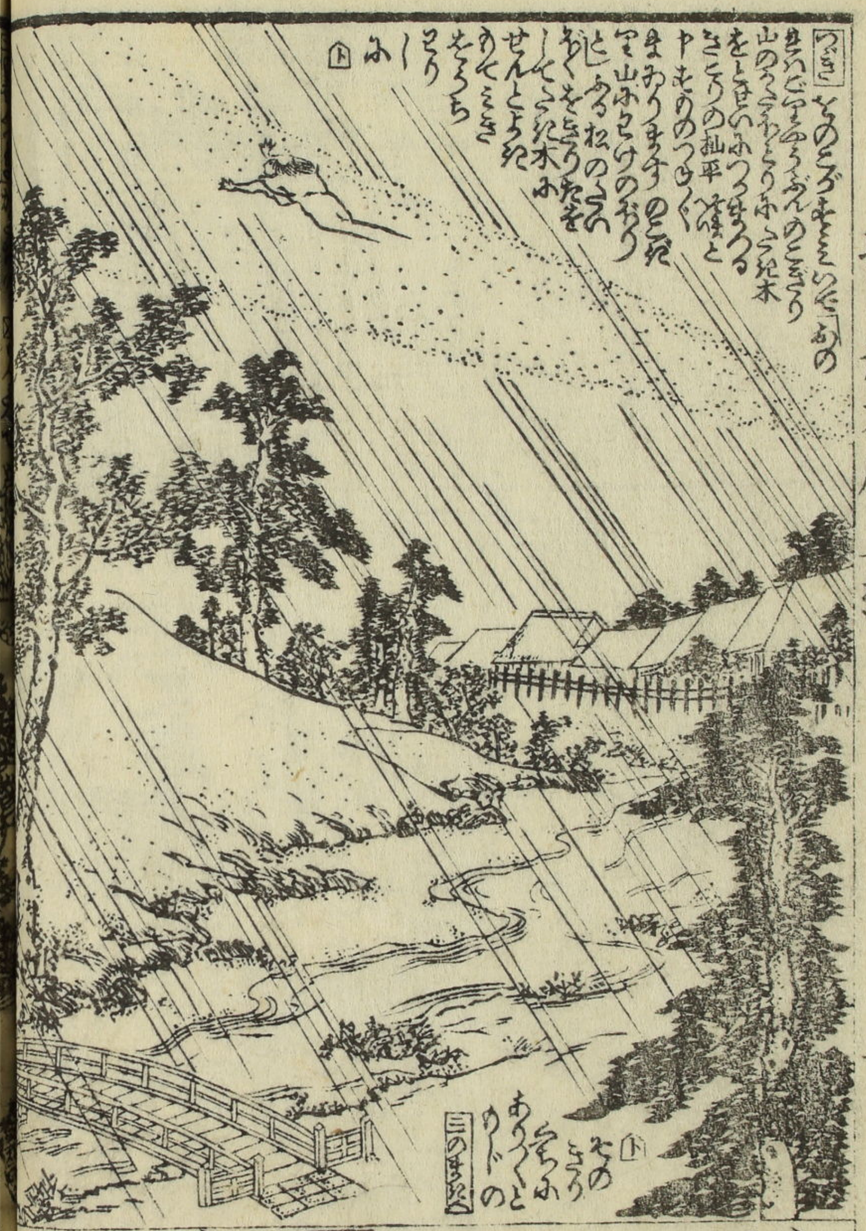




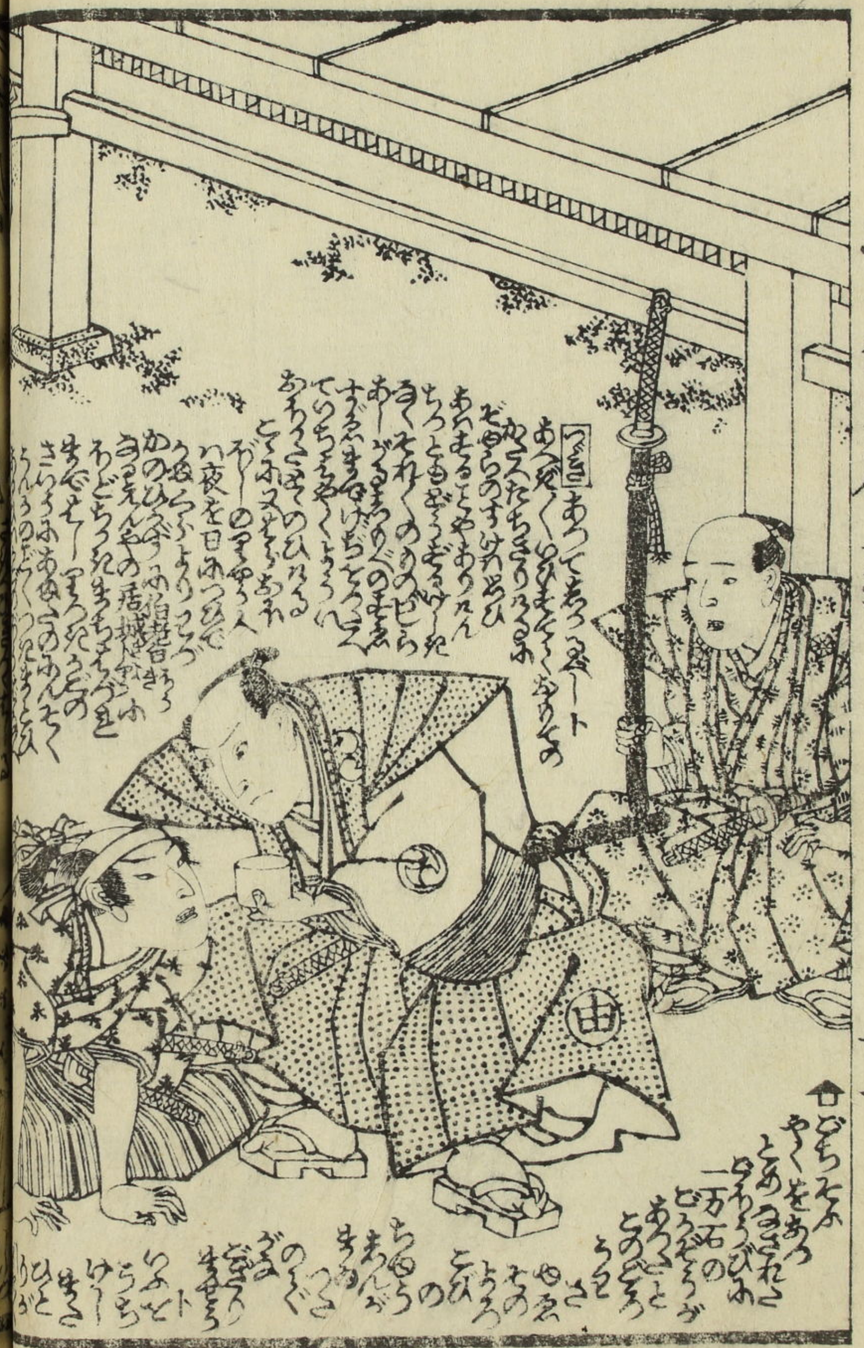


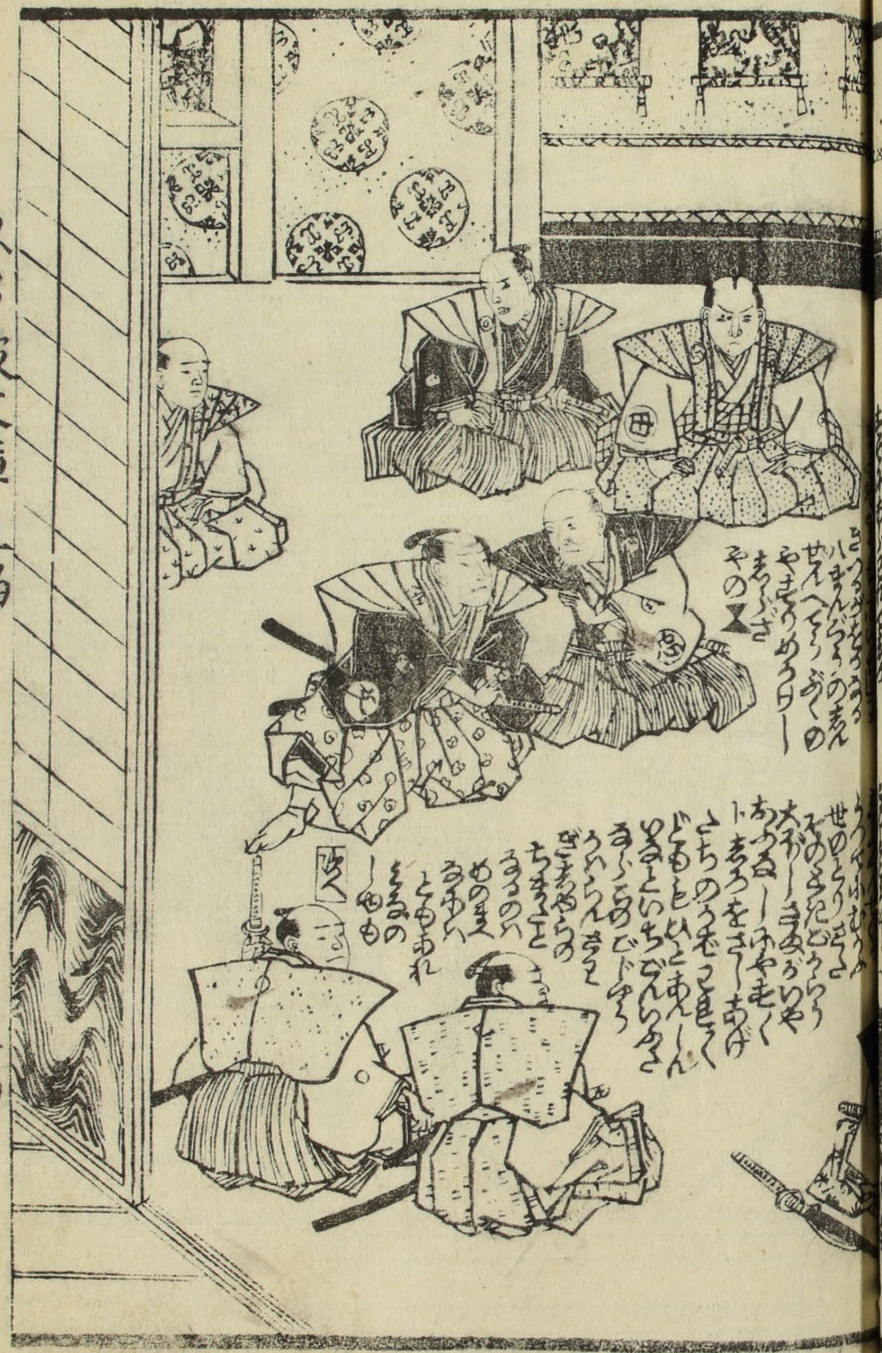

由良之助

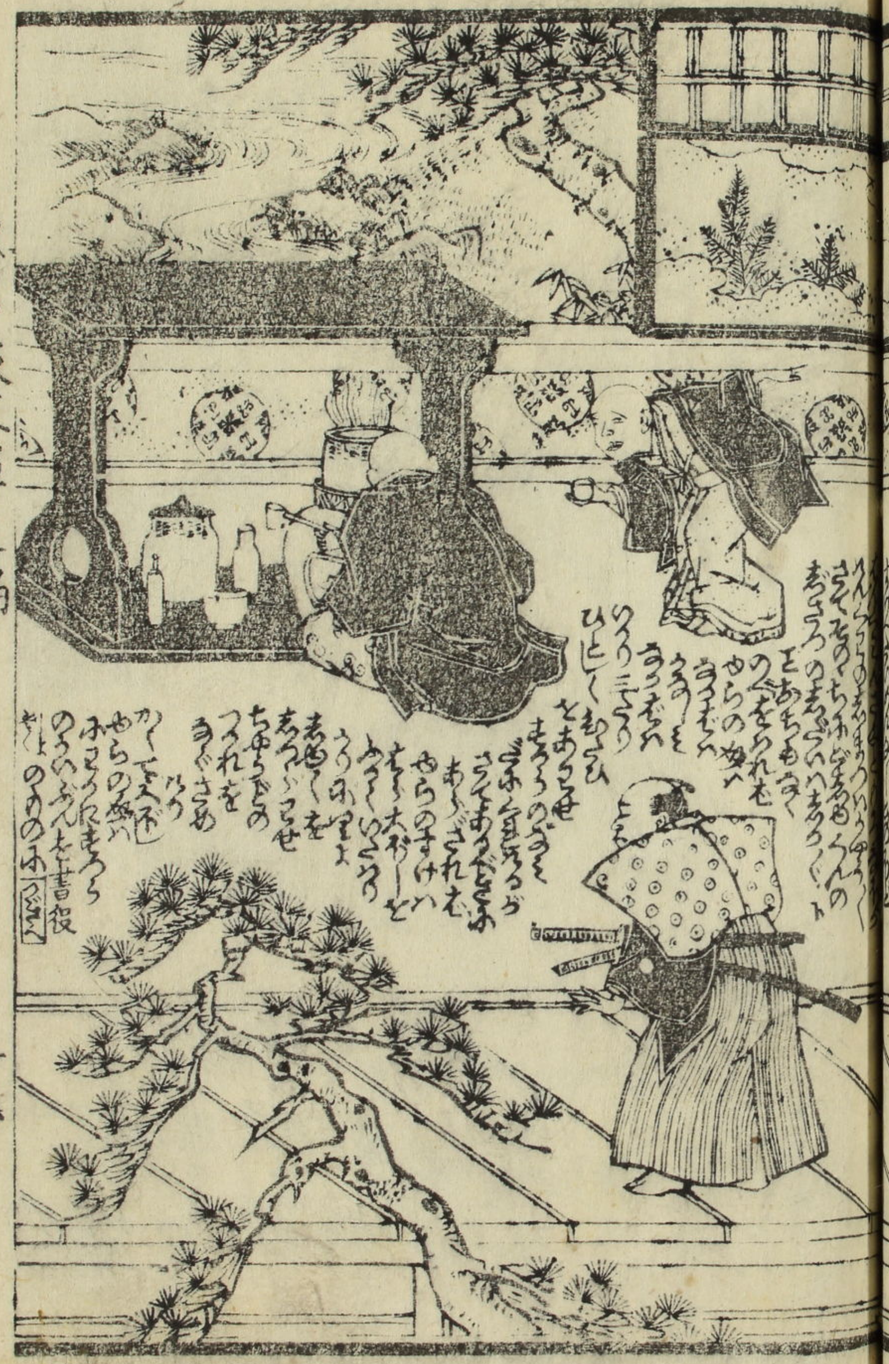




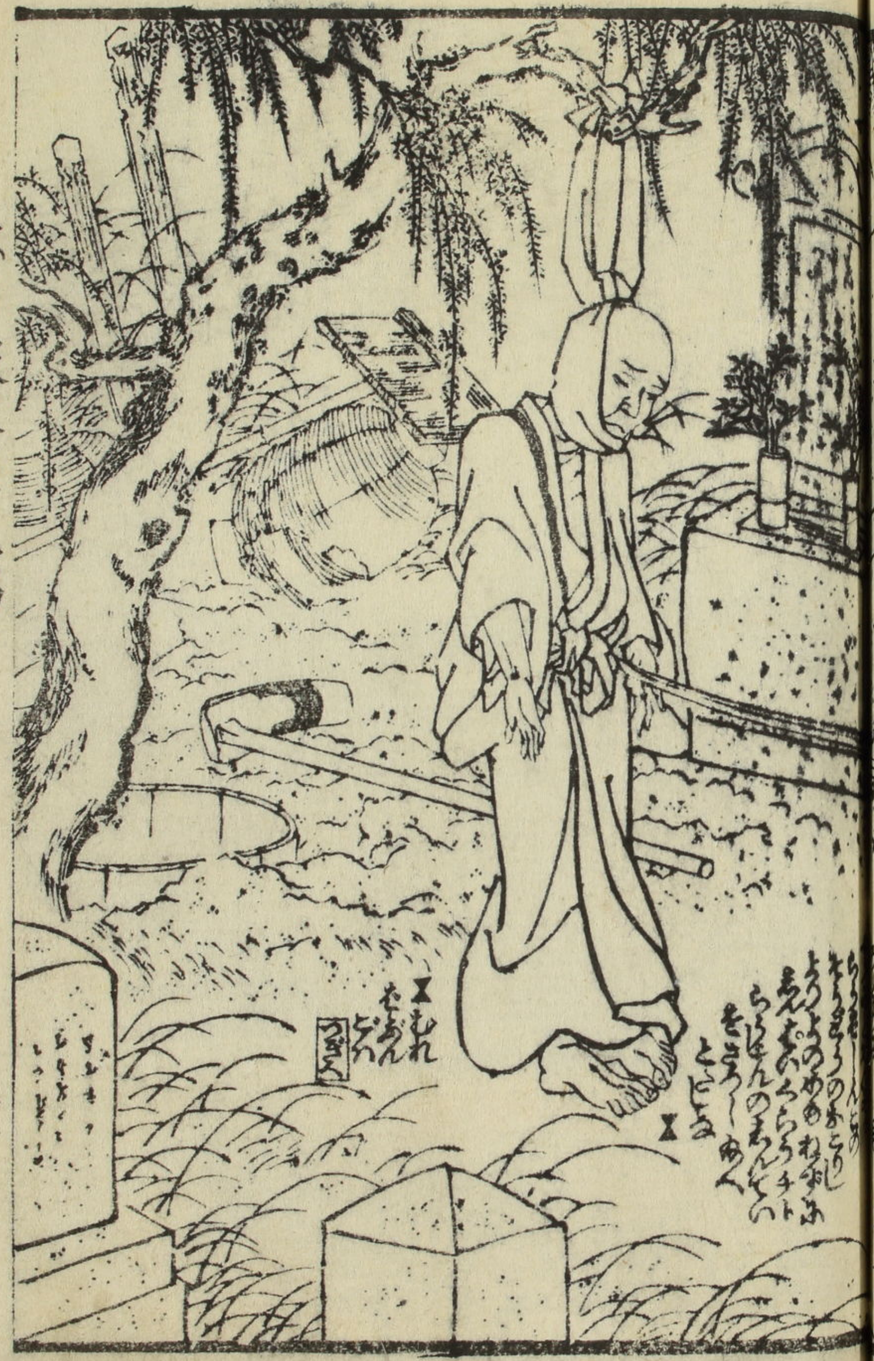
芳國画
種久作

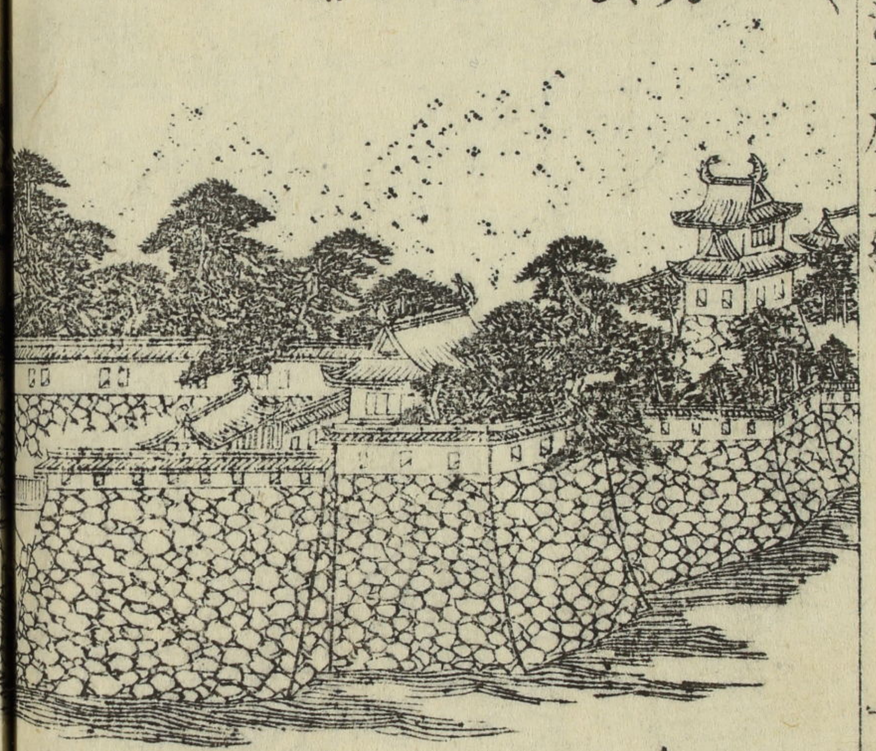


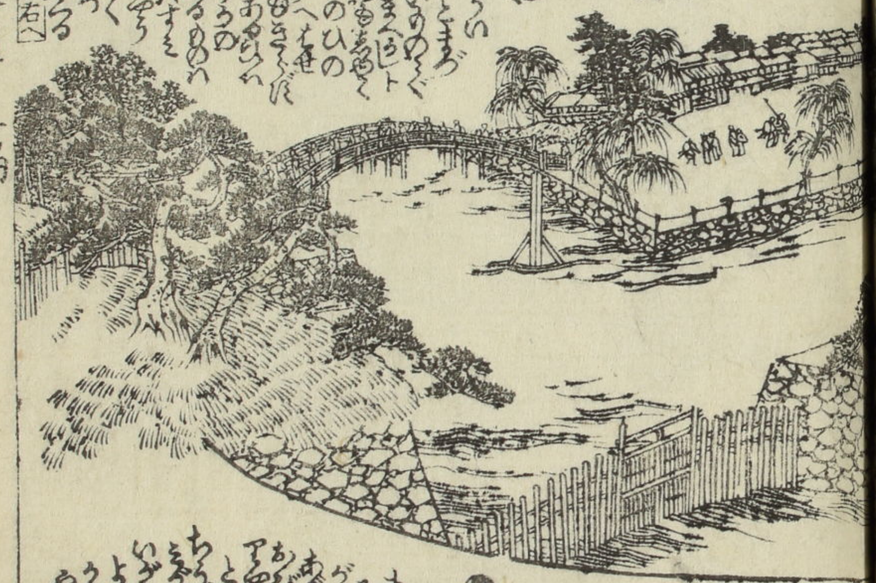




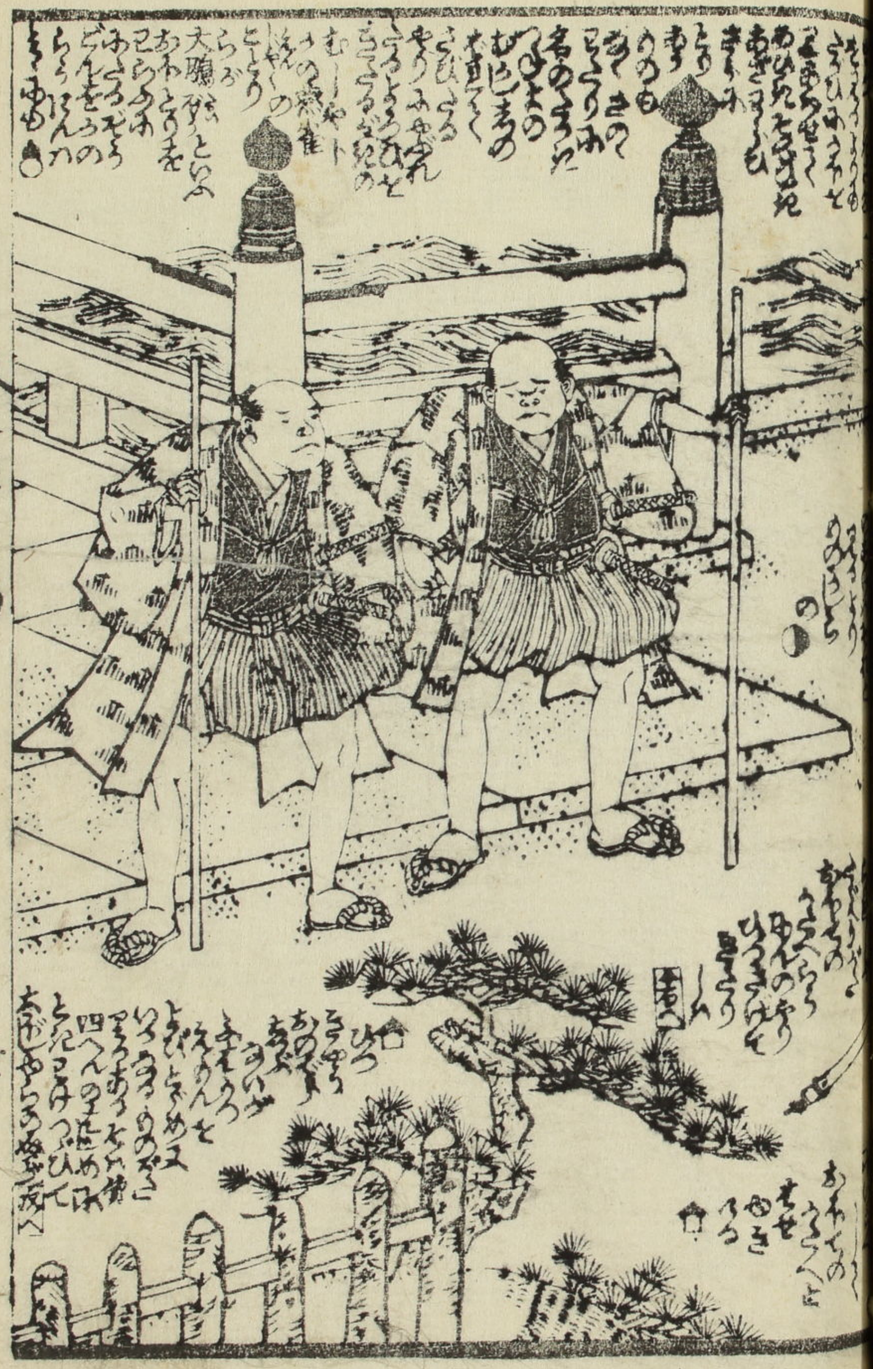
此圖ハ大星由良之助義士の面々を閑室ニ招き潜ニ復讐の計策を廻らすの体ニて後の巻ニ悉く説ク







勝



伊呂波文庫四編上冊

忠臣
貞婦

古泉堂梓

種久作國芳画

傭書交來
門人芳房補助

下

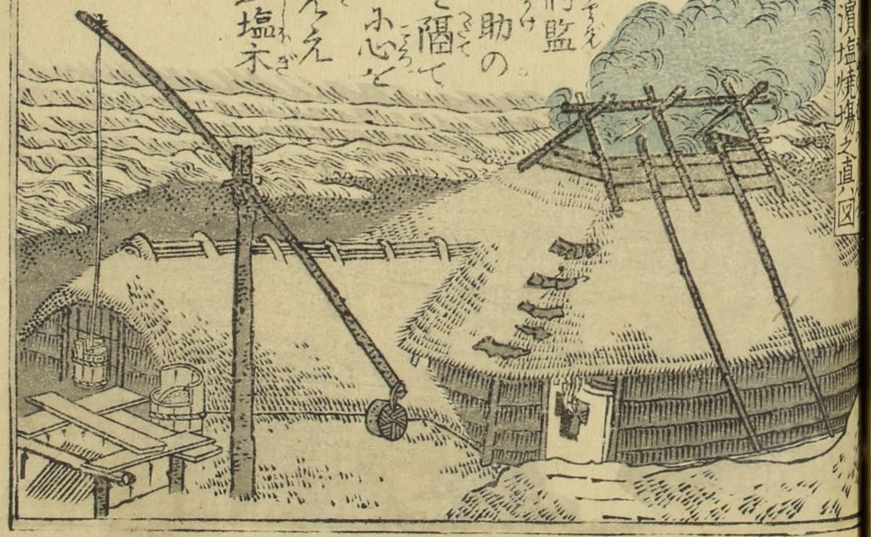
上

蜀の蜀呉の揚いろぬ支那乃

名産あまご。夫等を輙く取て
脱除吾皇國でん山鳥の尾州雞冠
紀ゐ國密柑をれもゝ增益て高名ゐ衣縫ふ
てゑ播磨濳赤穗の浦ゐ塩竈あるゑ
それぐ口繪ゐ看官へ尊覽ます茲巻ゐ
何某ゞ嬢子小笹と妻老木ゐ婚嫺下僕
間ゐ引出を海賊乃久助船へ一段骨子
船呼このゑ次。ぢん油千鳥のもりや地理
碎けどゝも。そゝて塩屋のくむり程立さ趣向ゐてゑ
ざれた只、此上へ幾重ゐを立消のせぐ末
の煙り諸其ゐ。御笑覽て幾望ゐ

已未梅夏結稿
庚申青陽発市

柳煙亭種久記


赤穂濱塩焼場之眞図

久吾文庫 印

柳煙亭種久作

一勇齋國芳画

忠臣貞婦いろは文庫

第四編

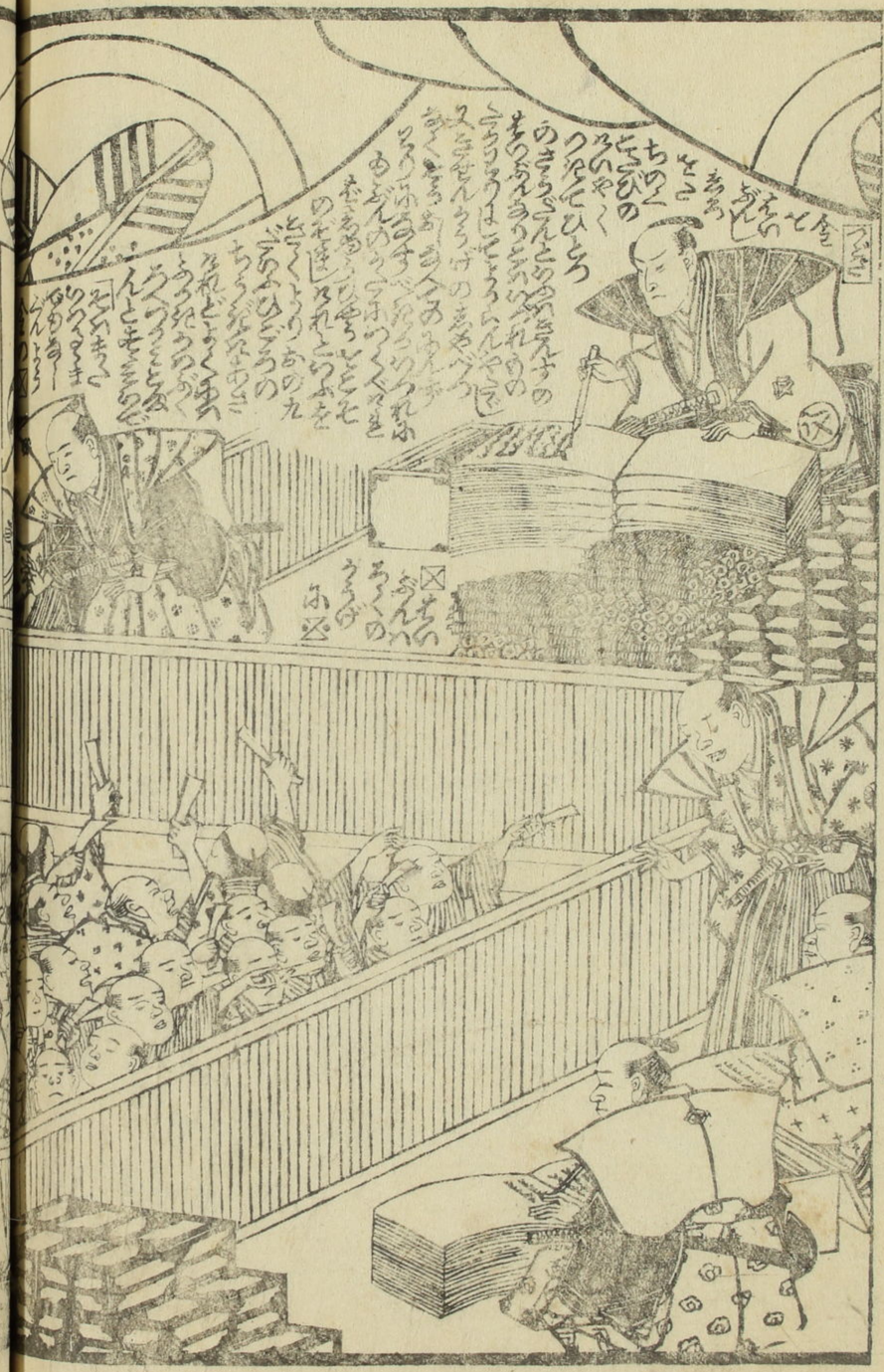
下集

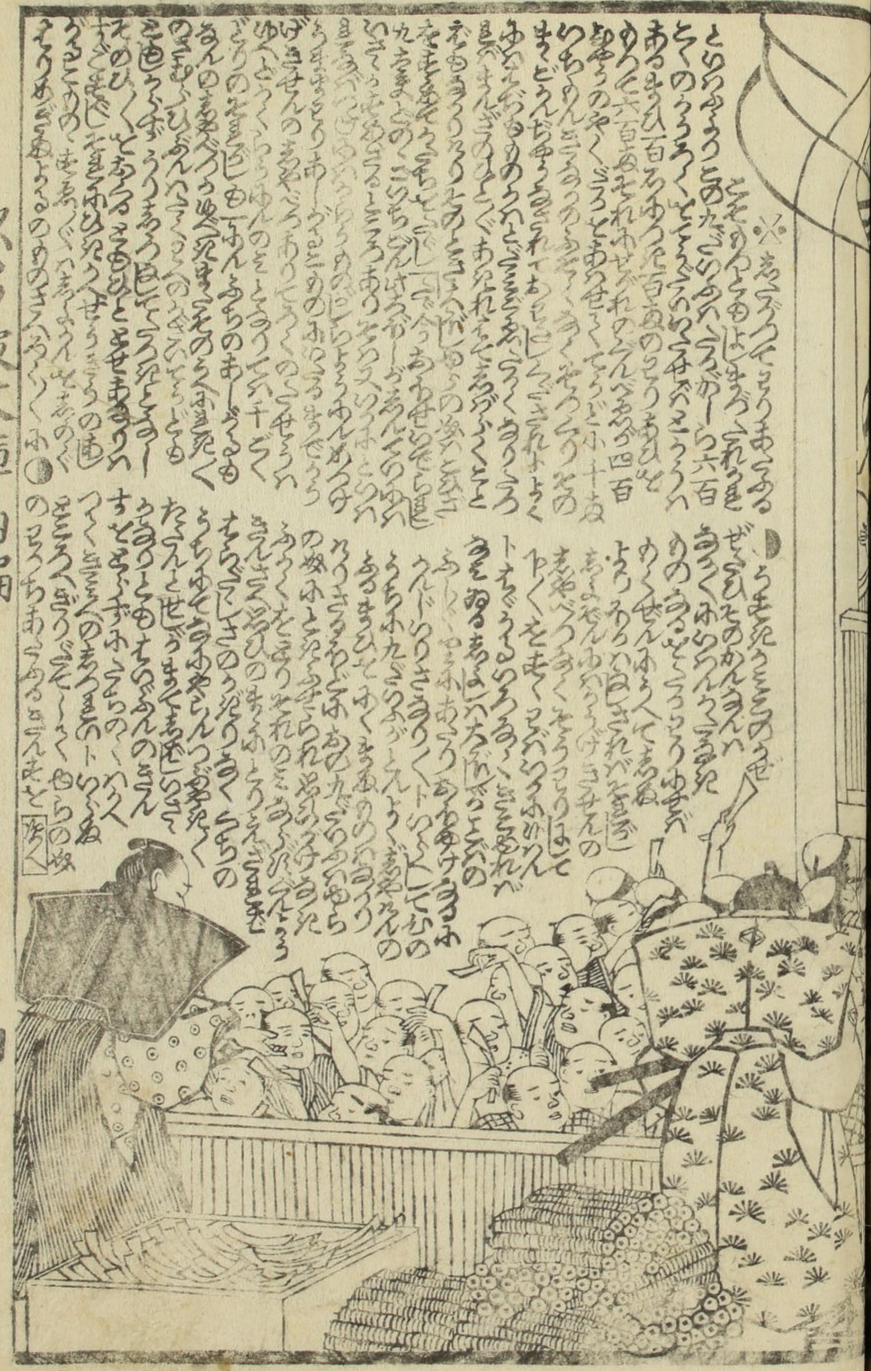
将監令閨老木

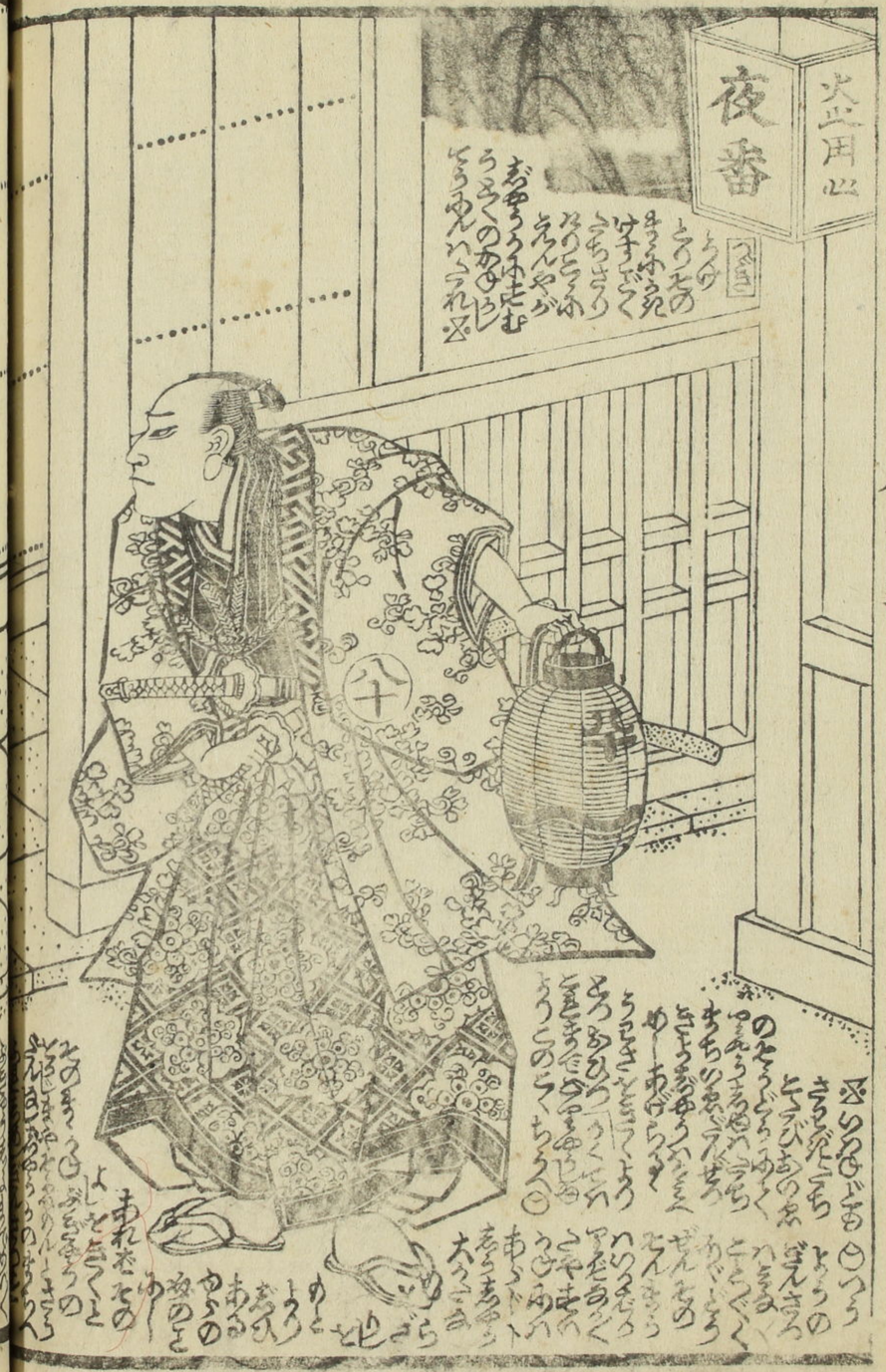
庄山将監の嬢小笹

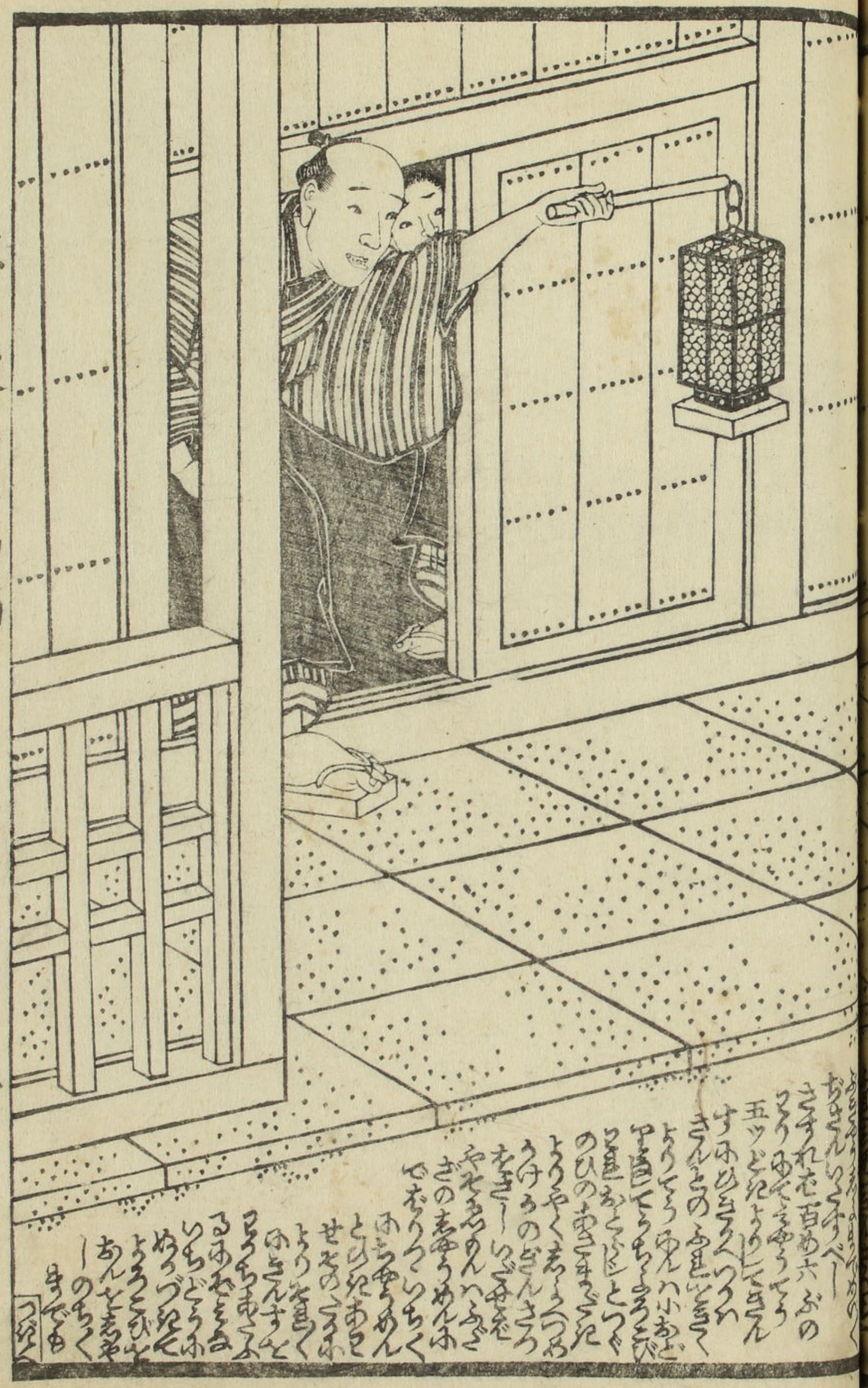
賊船の首領辰虫氣樓浪五郎一名久助庄山将監の妻子を掠奪一洋中ゟ困るとゐ後回よくろ〳〵くべー

海賊首領
辰虫氣樓浪五郎



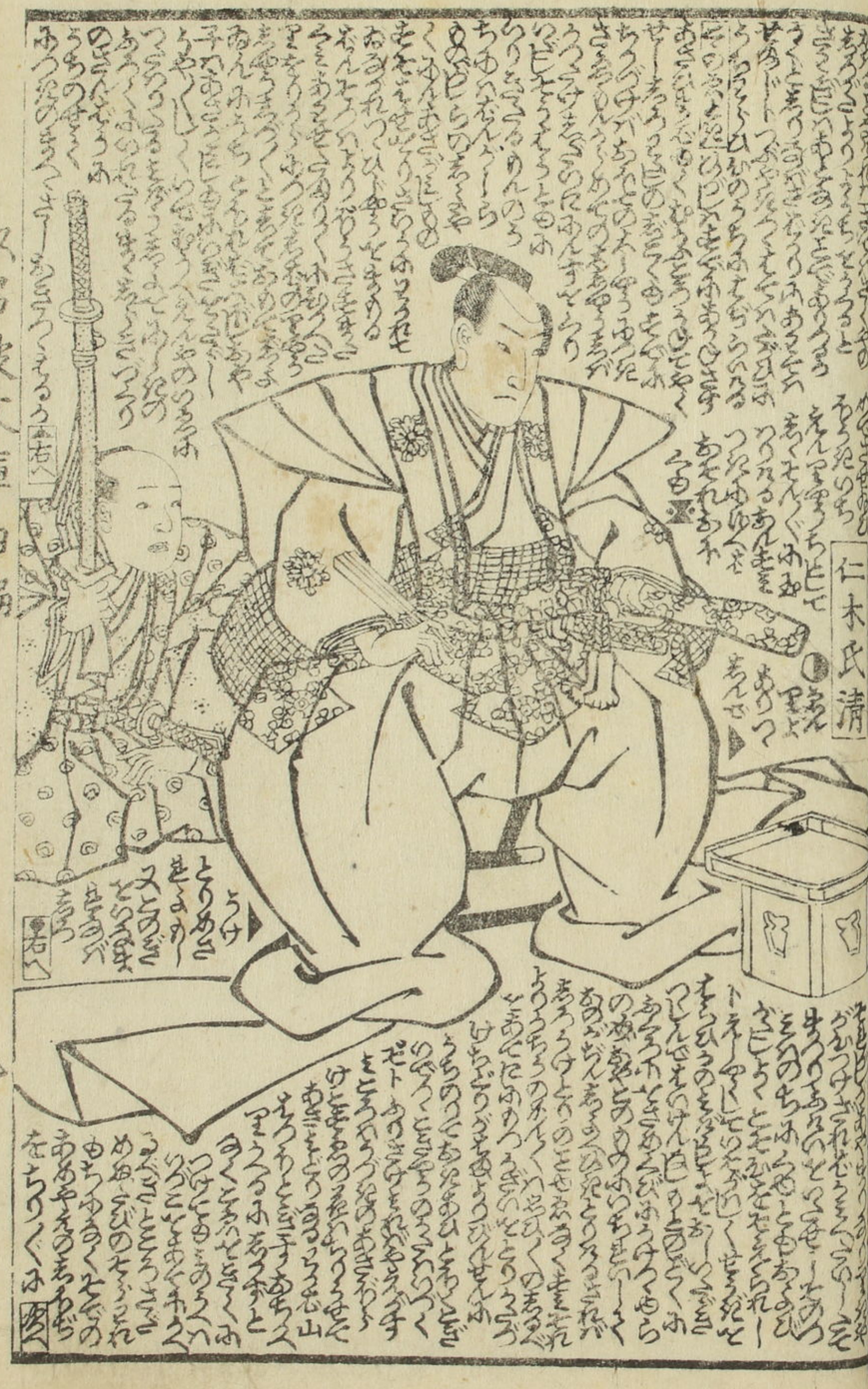



益用心
夜番
六十



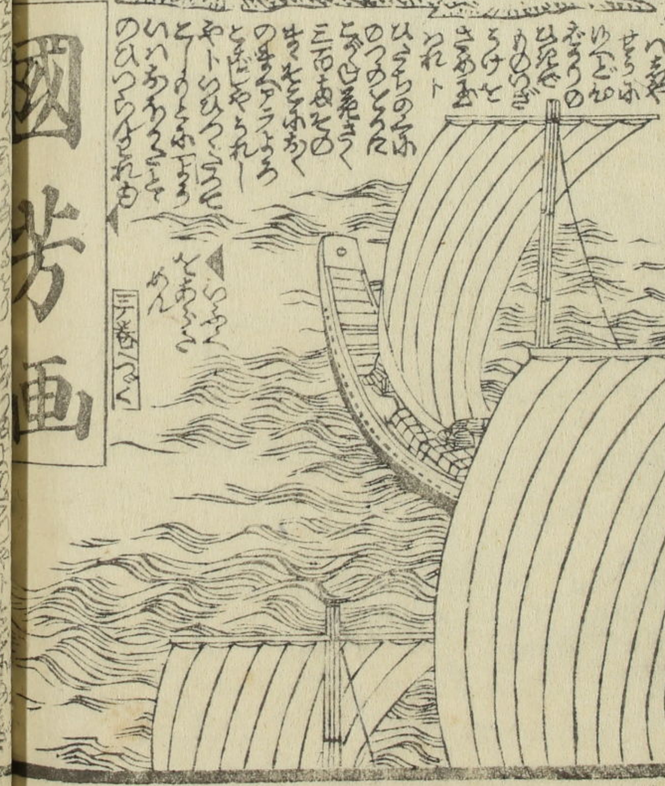
由
文

檀久状白



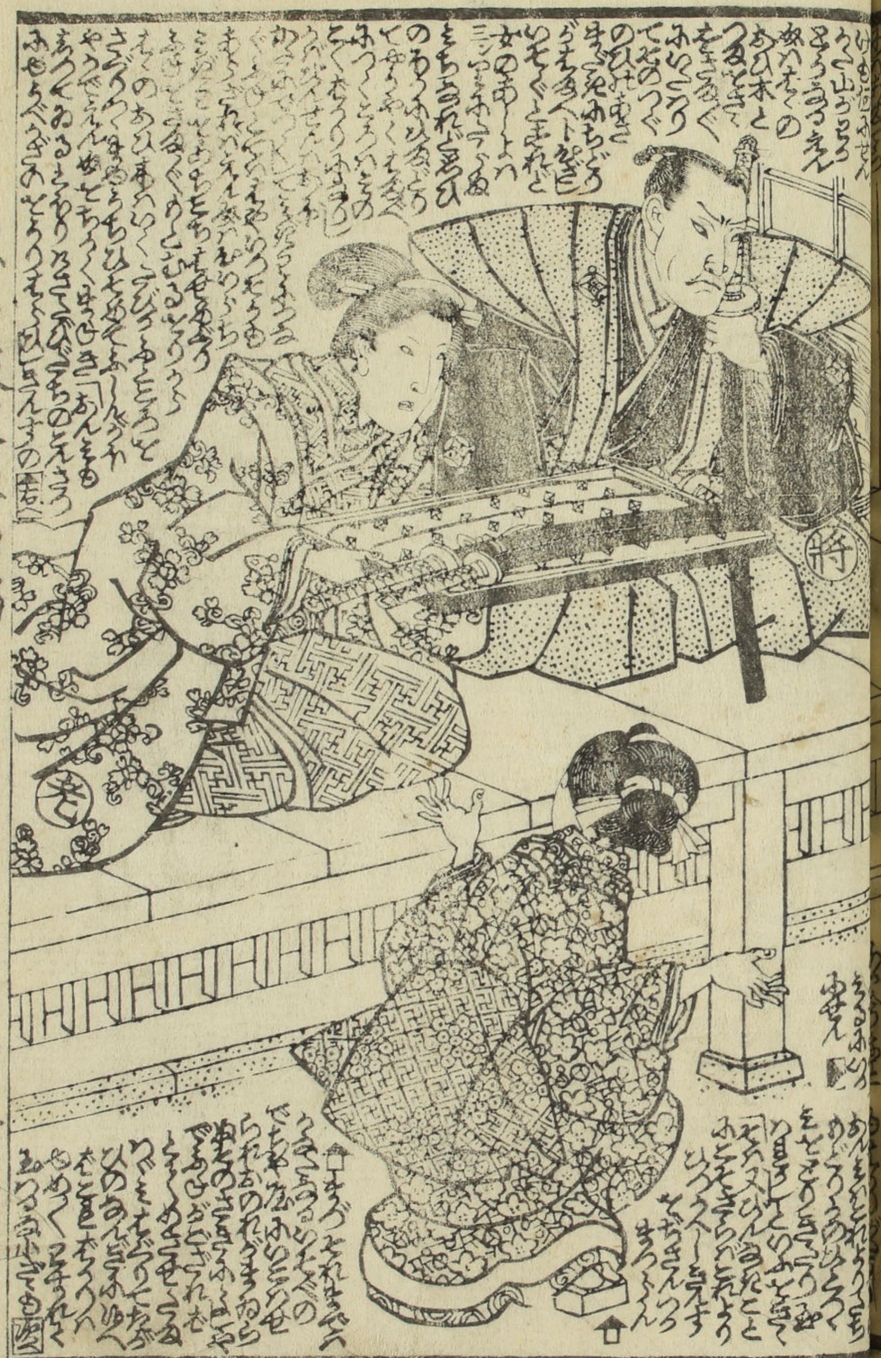
仁木氏清

種久作



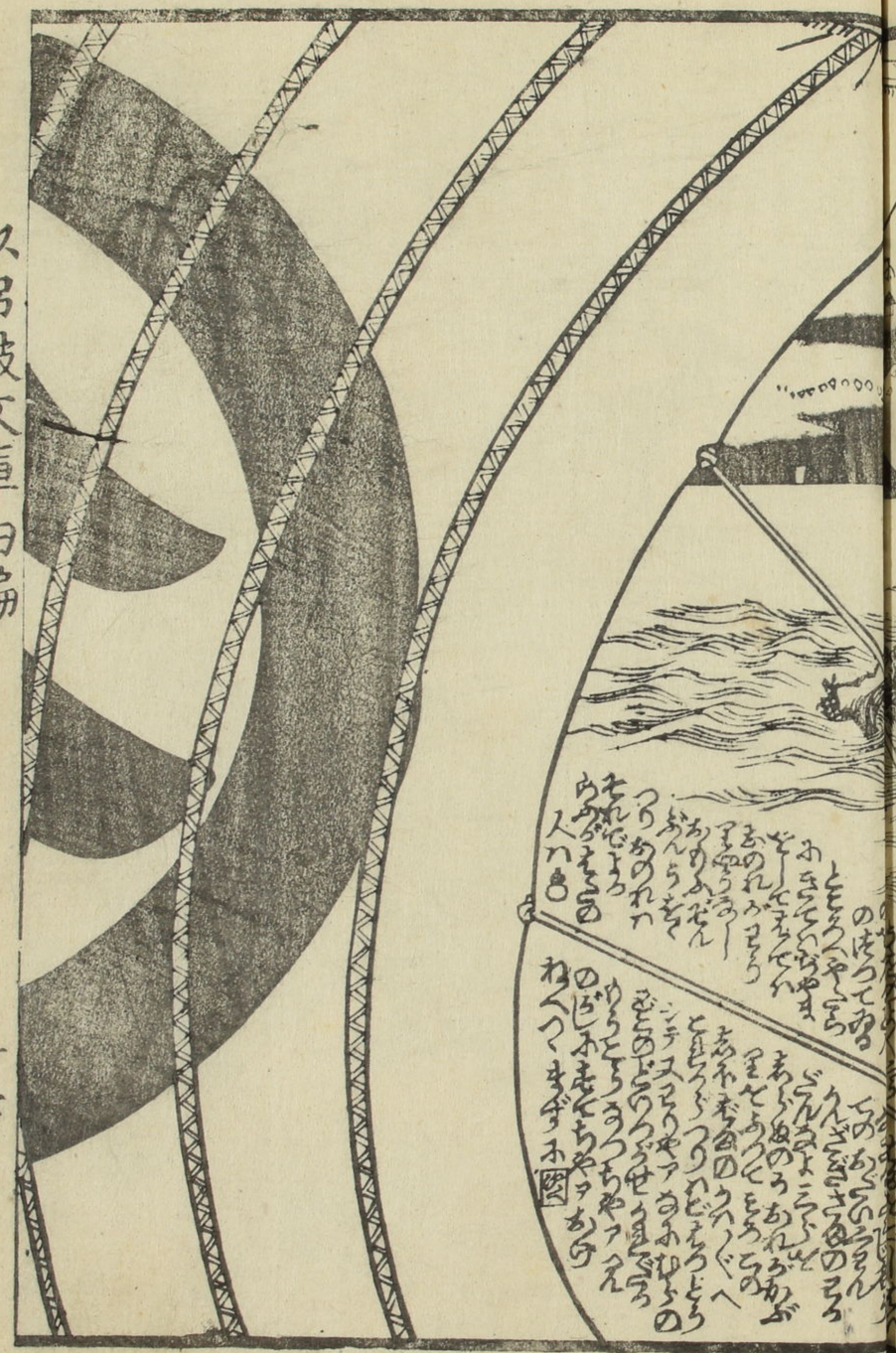
芳房補助

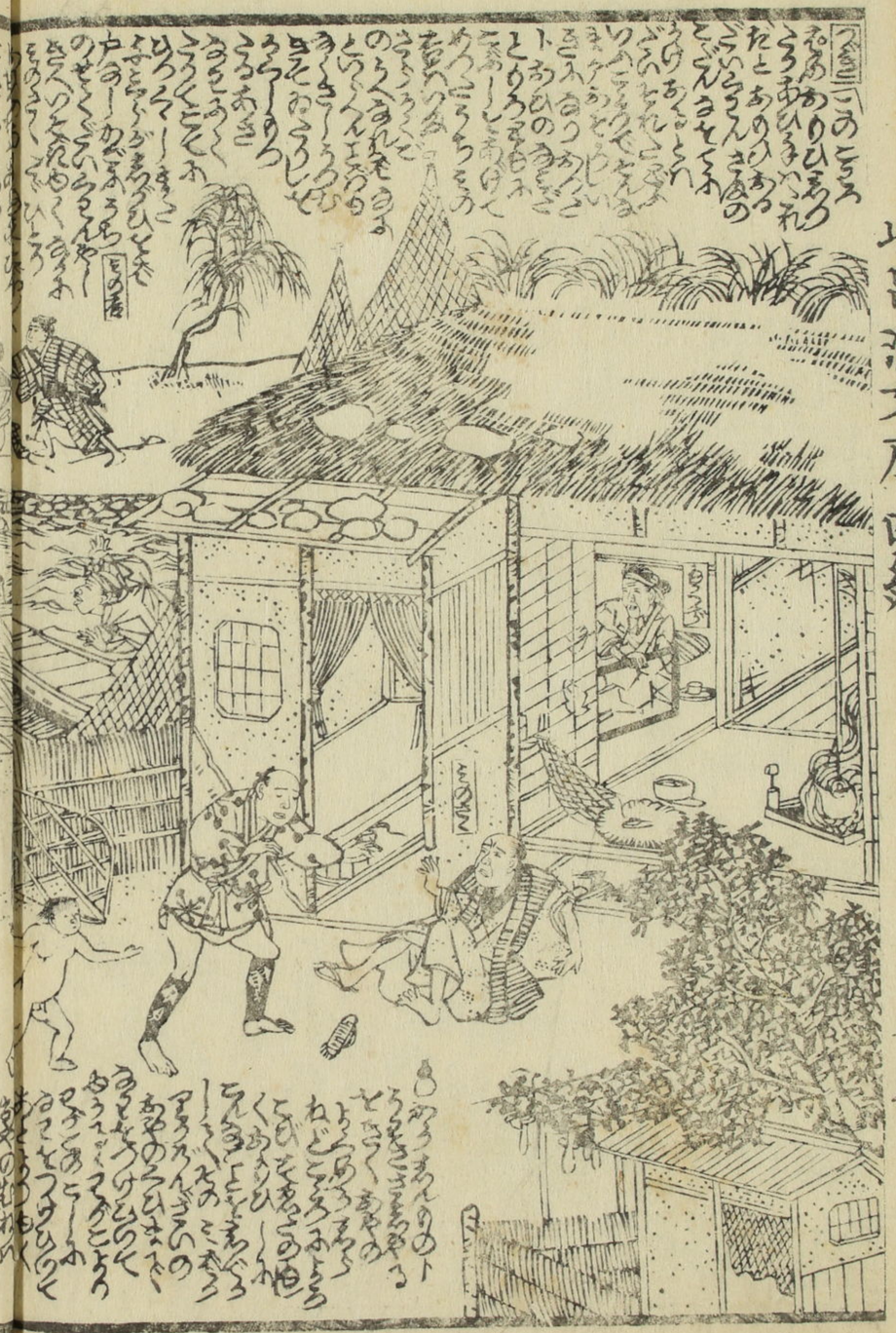
芳房画

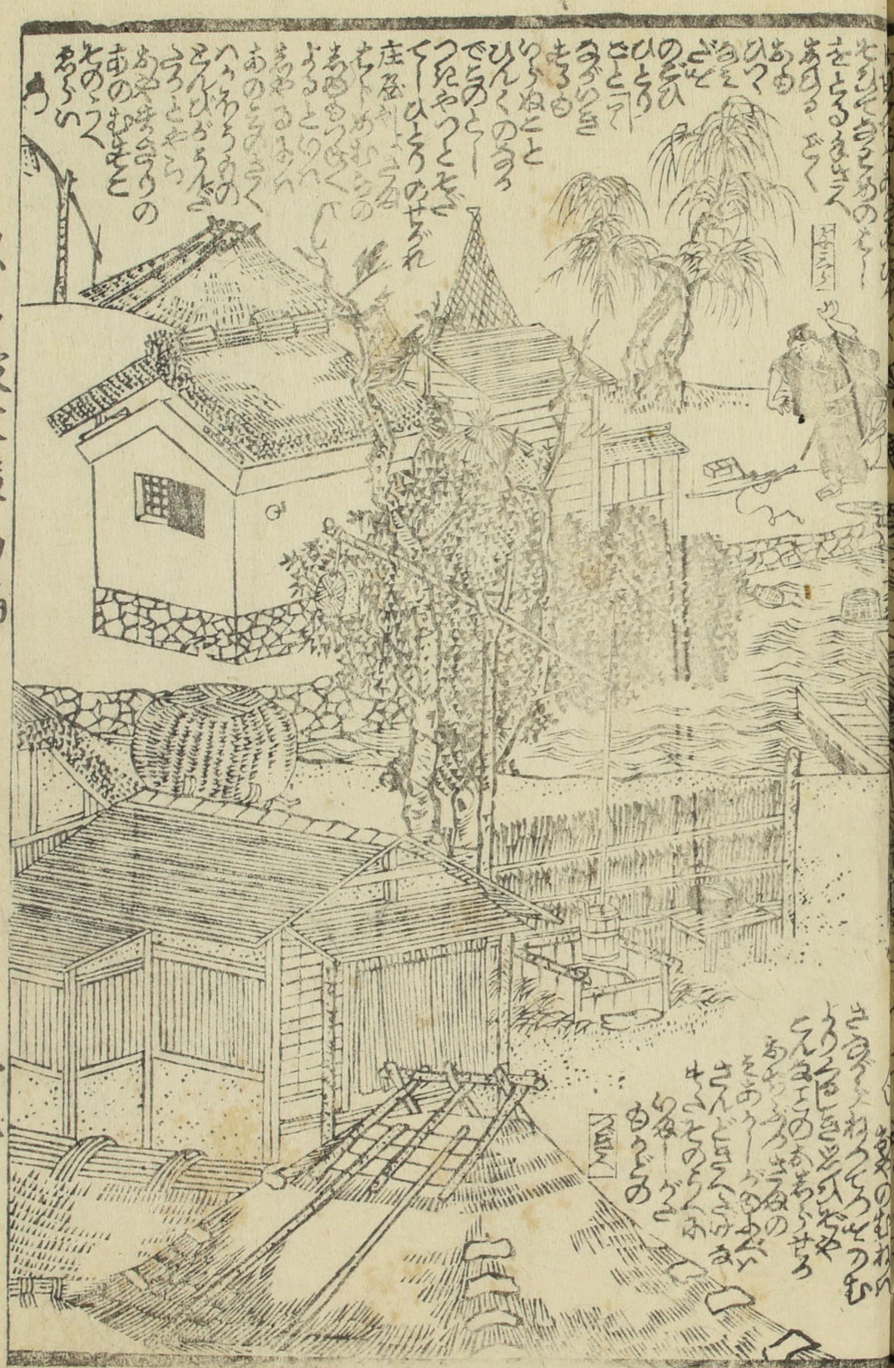


将

種久伏て
看官君子
前巻の末より
此巻ホ
本文の
ごとく
指画の
ごとく
前後ホ
あひまつ
二丁







つづき

種久作
國芳画

芳房補助

備書
交來